

授業支援システム「Campusmate/CourseNavig」開発背景と特徴

安納 順一

Junichi ANNOU

富士通株式会社文教ソリューション事業本部

EDUCATIONAL SOLUTIONS GROUP, FUJITSU LIMITED

E-mail: annou@soc.ssg.fujitsu.com

1. 従来の e-Learning システムの問題点

富士通が誇る e-Learning システム、「Internet Navigware」など、古くから e-Learning システムは存在し、大学に導入されてきた。しかしながら、現状では「活用」されている事例は少なく、さらには全学的に利用している例は数えるほどと言ってよい。

まさに教育の実践現場であり、かつ IT との融合を早い段階から模索してきた大学において、なぜ e-Learning システムが普及しなかったか。それは、従来の e-Learning システムが抱える根本的な問題が原因となっているためである。その問題点とは、(1) 自己学習を想定したシステムであること、(2) 教材作成の負担が大きすぎること、(3) 授業スタイルの変革が求められること、の3点である。

(1)の問題は、e-Learning システムが世の中に出だした頃は誰も気づけなかった。e-Learning とはこういうものだという先入観や目新しさのためか、「オンラインテスト」や「自動採点」、「自動進捗管理」など、まさにコンピュータが得意とする機能を強引に見せつけられることにかえて歓迎的でもあった。これらの機能をなんとか授業で生かそうと模索してはみたものの、「何かが違う」という微妙な違和感が存在した。その違和感の原因は気づいてみれば実に単純なことであり、従来の e-Learning システムが「対面授業」を想定したものでないという根本的な思想の違いであった。通信教育やオンデマンド講義の場合、学生にとっての相棒はコンピュータの中にある「教材」である。しかしながら、対面授業においては、学生は教員と対峙し教員から知識を得るという大前提があり、その補助的道具としてコンピュータが存在する。しかし、従来の e-Learning システムは自己主張が強く、その中に「全て」が含まれていることを要求する。そのため、下手をすれば教員が「説明をしてくれるおじさん」的な位置づけであるという錯覚が発生してしまい、対面授業の意味がなくなるという本末転倒が生じる。

(2)の問題は、「コースウェア」とよばれる市販の教材においてカバーできるようにみえるが、実はそうではなかった。大学の授業には均一化を求められてはいない。そのため、e-Learning システムを授業に取り入れ活用するには、独自のコンテンツ作りが求められる。コンピュータをワーキングフィールドとして独自性を考えた場合、とかく「アニメーション」や「動画」といった、俗に言う「マルチメディア」を活用し、アイキャッチに優れた要素に注力してしまいがちである。このことは、黎明期よりコンピュータシステムに携わってきた人間であれば苦笑混じりにうなずかざるを得ない事実であり、コンピュータに敷居を感じる世代の教員であればなおさらであった。これは、メーカー側の責任が非常に大きいことはいわずもがなである。結局、マルチメディアを活用した独自性のあるコンテンツの開発は、誰にでもできるものでなく、タダでさえ忙しい教員にとって、当然のごとくその優先度は最後尾に位置づけられることになる。

(3)の問題点も、他の問題点と同様に e-Learning システムに対する「気負い」の結果である。こうした e-Learning システムは、本来の授業に取って代わることを目的としており、授業を支援するという面が希薄であったといえる。そのため、「教員が学生に教える」ことを基本的なスタイルとして維持し、かつ対面授業においてこそ独自性を表現しなければならない大学にとって、ある種「質」の均一化をはかろうとする e-Learning システムは根本的に矛盾したシステムであったといえる。

2. 新しい e-Learning システムの必要性

以上の問題点が見えてきたとき、自主学習も含めた e-Learning システムとしてひとくくりに考えるのではなく、対面授業を想定した「授業支援」に必要な機能をもう一度見直す必要性にせまられた。

従来の失敗やお客様からのヒアリングの結果、(1)

科目を中心とした管理構造であること、(2)教員と学生の負担を減らせるシステムであること、(3)他のシステムと連携が行えること、という3つの基本方針のもと、富士通ブランドとして新たな授業支援システム「Campusmate/CourseNavig」を開発することになった。

3. Campusmate/CourseNavig の特徴

Campusmate/CourseNavig は以下の特徴をもった授業支援システムである。

- ・対面授業での活用を想定
予習～対面授業～復習という学習サイクルを管理し、大学での対面授業のスタイルを変えることなく、あくまで授業を支援するシステムとして緩やかに導入を進めることができる。また、「講義(科目) - 授業 - 教材」が階層的に管理されているため、授業運営のイメージ通りに教材を管理することができ、授業後でも目的の教材を見つけやすく直感的な操作で利用可能である。
- ・既存の教材を活用、流用可能
教員は、特別なツールを使用して教材を作成する必要は無く、これまで使用してきた PowerPoint や Word 等のドキュメントをそのまま教材としてアップロードすることが可能である。そのため、教材作成の負担を増やすことなく授業運営に組み込むことが可能である。操作に慣れた教員は、オンラインテストやアンケート、レポート教材、学習教材を個別に作成することも可能である。これらの教材は将来流用して再利用することも可能となっている。
- ・ポータルシステム、事務システムとの連携
ポータルシステム「Campusmate/Potal」と連携し、全学ポータルの一部として組み込むことが可能である。この場合、CourseNavig から発信したメッセージ(教材が公開された、レポートが評価された等)を Potal のお知らせとして伝達したり、Potal が持つ時間割機能から講義のホームに移動するなどの連携が可能となる。もちろん、シングルサインオンが可能であり、ポータルシステムにログオンしたユーザはそのまま CourseNavig の授業支援機能を利用することが可能である。
また、対面授業として運用するために必須となる履修情報を、履修登録システムと連携することで一括登録する機能を持つため、個別のデータを作成して登録する必要が無い。
- ・その他の特徴
この他、講義ごとの掲示板機能や FAQ 機能、教員と学生の1対1の質問回答機能、TA による運用補助機能、成績管理機能など、大学の授業運営

に必要な機能が一通り実装されている。

4. Campusmate/CourseNavig の今後

Campusmate/CourseNavig には、開発の第一段階として基本的な機能の実装を行った。そのため、はじめて授業支援システムを導入されるお客様には非常に使いやすいシステムに仕上がったと考えている。しかしながら、既に e-Learning 製品を使いこなし、さらなる高度な利用を目指すお客様にはとっては物足りない面があることも事実である。成績管理やテスト作成機能をはじめとして、さらに柔軟な運用が可能になるよう、お客様からの声に耳を傾けエンハンスを行っていく予定である。

略歴

安納順一

1991年、富士通株式会社入社。入社以来、文教分野のSEとして、主に大学のコンピュータシステム構築に携わる。